

LL ニュース

No. 33

October 10, 2006

愛知大学豊橋語学教育研究室

特集 ー世界の文化ー



聖体大祝日（ドイチュラントベルク／オーストリアのシュタイアマルク州）
野外に設けられた祭壇と花絨毯の前でのミサ

CONTENTS

◎特集 ー世界の文化ー	●仏誕節から見たアジア(片 茂永)	12
●ロシアのお祭り	●良寛に想う(稻垣不二磨)	14
～マースレニツツア～(清水伸子)	●張愛玲と都市文化(桑島由美子)	16
●個人的なあまりにも個人的なフランス文学体験	◎「留学生が『お客様』にならない」講義の取り組み	
—知られざる作家リラダン(鈴木秀治)	(鈴木常勝)	18
●聖体大祝日	◎聖書と英語 (葛谷 登)	20
—ドイツ・オーストリアの祭りから(河野 真)	◎LL Tea Time	
●アングロ・サクソン文学におけるキリスト教の影響	●私のハングル習得法(金子可奈)	22
(田本真喜子)	●英語学習の誤解に気づくまで(足立義説)	23
●なぜかわかつちやうタイ語：日本とタイの仏教用語	◎公開講座「言語」2006後期プログラム	24
(加納 寛)	◎2006年度 外国語検定試験奨励金について	24

ロシアのお祭り ～マースレニツァ～

経済学部
清水伸子

今回は「文化」についてというLLニュースのお題がきましたが、今回のLLニュースは、『天高く、馬肥ゆる』秋に皆さんに読んでもらえるようすから、食べ物が絡んだロシアのお祭り、「マースレニツァ(Масленица)」を紹介したいと思います。

マースレニツァの起源とは？

ロシア人に、ロシア独特のお祭りは何かと質問すれば、ほとんどの人が「マースレニツァ」を挙げるでしょう。しかしこのお祭りを語るためにには、「パスハ(Пасха)」についても触れなければならないと私は思っています。というのも、「マースレニツァ」の日は「パスハ」を基準として決まるからなのです。では、この二つのお祭りは、いったい何のお祭りなのでしょうか？

実は「パスハ」は、キリストの復活を祝う「イースター（復活祭）」であるとはっきりしているのに対し、「マースレニツァ」の起源ははっきりしていません。『「パスハ」の前の長い大斎期（断食）の始まりを告げる春のお祭り』というキリスト教起源説と、『キリスト教が入ってくる以前の原始宗教に起源を持つ春を迎えるお祭り』という原始宗教説の二つがあります。

起源はよく分からぬのですが、1880年ごろの文献から見えてくる様子は、昔から「パスハ」よりも、この起源のはっきりしない「マースレニツァ」の方がはるかに盛大かつ娯楽性に富んだお祭りだったということです。「パスハ」の時には、教会でこそ盛大なミサが行われますが、教会に行かない人にとっては昼頃から集ってパーティーを開きご馳走を食べるだけの日です。しかし「マースレニツァ」では、町の広場に大きな雪の滑り台や競馬場さては観客席まで作って連日馬術競技やそり競争（図版参照）が昔は行われたようです。「マースレニツァ」の

時には、人々はかなり浮かれまくっていたようで、17世紀にロシアを旅行したイタリア人が『人々は悪魔に魂を売り渡すがごとき道の踏み外ししよう、このお祭りの時に聞こえてくるのは、だれそれが殺されたとか、だれそれが川の中に投げ込まれたといったことばかりで、まるでお祭りというよりも乱痴騒ぎである』と書いています。

暦の上では毎年「パスハ」の8週前（大体2月中旬過ぎ）の1週間が「マースレニツァ」とされています。しかし「マースレニツァ」は祝祭日ではないので、今では連日お祭り騒ぎだった100年前、200年前のような盛大さはないようです。今では、その週の最後の土日に、町の広場に雪山や木造の滑り台が作られ、人々がそれを滑って遊んだり、口ウを塗った丸太のてっぺんにウォッカを縛り付けウォッカ取り競争をしたりと、大昔と比べるとずいぶん大人しいお祭りとなっています。

「マースレニツァ」で変わらないことといえば、それは家庭で、そして外で、とにかく朝日晚と「ブリヌイ」というクレープのような食べ物が欠かさず出てくるということです。人々も『「マースレニツァ」なんだから「ブリヌイ」だけは外せない』という感じでそれを食べます。この「ブリヌイ」は丸く焼かれることから、太陽を象徴していて、だから春を迎えるお祭りの「マースレニツァ」で食べられるようになったのだとも言われています。

ブリヌイ食べまくり週間：マースレニツァ

日本には、ある決まった時期にある特定の食べ物を食べるという習慣がありますが、同じものを1週間食べ続けるという習慣はないのではないかと思います。例えば、土用の丑の日にはうなぎ、秋のお彼岸にはおはぎを食べますが、うなぎやおはぎを1週間毎日食べ続ける人はそうはないでしょう。

「ブリヌイ食べまくり週間」などと、がさつな表現を使ってしまいましたが、まさにこの表現がぴったりなほど、現在は「マースレニツァ」と言えばそり競争や滑り台よりも「ブリヌイ」です。「マースレニツァ」の時期に招待されると、必ず「ブリヌイ」でもてなしを受けますし、ホームステイ先の家庭で、来る日も来る日も毎食『「マースレニツァ」なんだからだめよ』と「ブリヌイ」を断らせてもらえず、気持悪くなりながらもがんばって食べた、という留学生の話も聞いたことがあります。



「マースレニツツア」 グルジンスキ一画

「ブリヌイ」とは、ロシアの伝統的な家庭料理の一つで、クレープに似た食べ物と思ってもらっても構いません。しかし、厳密に言うと、クレープよりももう少し厚めで弾力があり、ややもちもちした食感なので、やはり「ブリヌイ」は「ブリヌイ」であってクレープじゃないのです。これは、作るときに生地にサラダ油とケフィールというスラブ独特のヨーグルト（ブルガリアヨーグルトとは菌が違うらしい）を混ぜるというのがポイントのようです。

そして、ロシア人は、この「ブリヌイ」で味付け肉やレバーのそぼろ、生のサーモンを包んでオードブルとして食べるか、サワークリームか山ほどのジャムと共にデザートとして食べるのです。「ブリヌイ」で包む具の種類は家庭ごとに『母の味』があり、またロシア人の家庭では通常複数のジャムを前年の夏から作り置いていますので、ロシア人は「マースレニツツア」の間は毎日食べ方を変えて「ブリヌイ」を食べ続けます。

マースレニツツア後は断食!!：大斋期

「マースレニツツア」の週が終って、9日後から復活祭の大斋期（断食）が始まります。

復活祭の前に大斋期があるのは、人々のかわりに磔刑になったキリストの苦しみをおもうためだそうですが、断食といつても全く何も食べないわけではありません。何と言っても、大斋期は40日間もあるのですから、何も食べなかつたら、餓死する人も出てしまします。基本的に、大斋期の間は、肉は食べてはいけないのですが、魚や乳製品、卵料理は食べてもよいとされています。この大斋期には、大学の学食などで肉料理、特に牛肉と豚肉を使った料理はほとんどメニューから消えます。

そして余談になりますが、この大斋期には、肉を食べてはいけないと同時に、もう一つ、してはいけない、というか、人々がすることを避ける事があります。それは、大斋期には結婚式を挙げないということです。

社会主義体制だったソビエト連邦時代には教会が弾圧されました。したがって結婚式は結婚登記所である役所で挙げ、教会式は挙げないという習慣がロシア人に根付きました。結婚登記所は役所ですから、大斋期の間ずっと閉まっているわけではありません。それどころか、結婚式を挙げる役所ということから、土日もやっているという珍しい公的機関です。しかし、その信仰の深さに関係なく、多くの人が大斋期の結婚式を避けるようです。

再考：マースレニツツアの起源とは?!

信仰心は関係ないというのは、結婚式のみならず「バスハ」についても当てはまります。ロシア人は、断食をちゃんと実行していなかったとしても、また「バスハ」の日に教会に行かなくても、断食開けを祝って家族や友人でご馳走を用意したパーティーを開きます。ということは、実は「バスハ」は単なる「大斋期（断食）終了にかこつけて開くパーティーの日」と化しているとも言えるのです。

そう考えると、「マースレニツツア」の由来も、最初に紹介したような「キリスト教」か「原始宗教」かといった高尚な由来ではなく、食べ物や結婚式など一応制約のある大斋期（断食）が始まることにかこつけて、『とりあえず思いっきりドンちゃん騒ぎをしたい』という案外人間くさい動機から始まったのかもしれません。

個人的なあまりにも個人的な フランス文学体験 —知られざる作家リラダン

国際コミュニケーション学部

鈴木秀治



ある外国に关心をもった場合、そのきっかけはさまざまである。ふと手に取って読んで感銘を覚えた小説がその国の文学だったかもしれないし、何の気なしに見たテレビのドキュメンタリー番組に感動を受けたかもしれないし、自分の好きな芸術家がその国に生まれたからかもしれない。もっと直接的に、その国を訪れたことがきっかけになる場合もある。

わたしの場合は、高校生のときにはSFの魅力にとりつかれたのが、フランス文学開眼の契機になった。といっても、フランスのSF作家に夢中になったわけではない。当時のSFといえば、クラーク、アシモフ、ハインライン、ブラッドベリといったアメリカ作家のものが中心であった。御多分にもれず、最初はそういう作家のものを読んでいた。しかし、それだけでは満足ができず、時間的には古典にさかのぼり、また地理的にはヨーロッパやロシアや東欧などと読書範囲を広げていった。もちろん、日本も視野に入れていた。

その頃は、わざわざ人に知られていない作品をさがして読む傾向があった。しかも、ただ知られていないだけではなく、文学史的に見ても評価されているものを選んだ。高校生の文学青年らしく、精一杯背伸びをしていたのだろう。SFのテーマにあるロボットものにもおおいに関心があった。ロボット・テーマの古典であるヴィリエ・ド・リラダン（姓を正しく書くとこうなるけれど、慣例にしたがってリラダンと表記することにする）の『未来のイヴ』も、SFの文脈でたどりついたものである。

いろいろ調べているうちに、岩波文庫に『未来のイヴ』（上下）の翻訳があることを知った。訳者は渡辺一夫である。さらに岩波文庫で、『リュルア

ダン短編集』（上下）が出ていることもわかった。訳者は辰野隆、鈴木信太郎、渡辺一夫などである。いずれも品切れであり、古本屋でしか手に入らなかった。いまにして思えば、東京大学文学部仏文科のそうそうたる教授たちが、リラダンの紹介に力を尽くしていたことがわかる。

この4冊がすぐ入手できたわけではない。神保町の古本屋街に何度か足を運んで、ようやくそれを発見して大きな感動を覚えた。まず、『未来のイヴ』である。リラダンの夢想が展開するこの哲学的な長編は、いまでもたやすく読めるとはいえない。それを日本の高校生が読んでも理解できるわけがないはずだが、当時のわたしはこの難物を読み終えて「わかった」という手ごたえを感じた。リラダンの作品をもっぱらSFとして読んだためであろう。若い頃にありがちの思い込みの典型的な例である。

これに対して、『リュルアダン短編集』のほうは半分も理解できなかつた。こちらは必ずしもSF的な発想で書かれたわけではないので、リラダンの文学的な方法を読み取ることが難しかつたためであろう。文学史的にいえば、リラダンは象徴主義の文学者といわれる。まず、その象徴主義というものがよくわからない。象徴主義的作品といわれるものよりもむしろ、「ビヤンフィラートルの姉妹」「蛮人航海者」といった風刺的作品のほうをおもしろく読んだ。

『未来のイヴ』を読んだことのない人のために、その梗概を示しておこう。まず登場するのは「メン



リラダンの肖像

ローパークの魔術師」といわれた発明王エジソンである。かつてエジソンが苦境にあるとき助けてくれたイギリスの青年貴族エワルド卿がメンローパークを訪れる。卿は生まれてはじめての恋を得たが、その恋がまた大きな悩みを生み出していた。相手はアリシアという美貌の歌姫であった。その姿かたちはまさに理想そのものだったが、その精神は凡俗の極みであった。

恋人の女性における肉体と精神の乖離に直面して苦悩する卿に対して、エジソンはアリシアとそっくりのアンドロイド（人造人間）をつくることを提案する。人並みはずれた美貌と高貴な精神をもつ、まさに理想の女性となるはずである。約束の日にエワルド卿はハダリーという名のアンドロイドと対面する。ハダリーはまさに卿の夢の実現であった。卿はこのアンドロイドとともにイギリスに戻るが、途中大西洋上で船は火事にあいハダリーは海の藻屑と化してしまう。

まず登場人物がアメリカ人とイギリス人であることに注意を促しておこう。リラダンはアメリカに代表される機械文明に対しては批判的であったが、その半面で最先端の科学技術にしんしんたる興味をもっていた。リラダンの代表作である短編集『残酷物語』に収録されている「天空広告」や「栄光製造機」といった短編は、SFとの関連で論じられたりもするが、これも科学技術への興味なしには生まれなかつた作品といえよう。

さて、『未来のイヴ』がSFの先駆的作品という評価はゆるがないところだが、フランス人自身はどういう評価をしているだろうか。以前に友人とふたりで、フランスの評論家ジャック・サドゥールの『現代SFの歴史』を翻訳したことがあるが、残念なことにこれにはリラダンへの言及がない。イギリスのSF作家であり、すぐれた批評家でもあるブライアン・オールディスは、SF史の試みである『十億年の宴』で、きちんとリラダンをとりあげていて、『未来のイヴ』と『残酷物語』を簡潔に紹介している。

かなり以前のことだが、文学部の「フランス文学講読」の授業でリラダンの『残酷物語』をとりあげたことがある。フランス語やフランス文学を専攻し

ている学生諸君にとって、リラダンは難解であった。構文が複雑であり、珍しい単語もしばしば登場し、文章は晦渋といった具合だからである。仏文の学生とはいえ、フランス語に関心はあってもフランス文学そのものには興味が乏しい学生が増えてきた時代であった。

この授業に出席していたある女子学生は、フランスに短期留学をしてからわたしにこんな経験を話してくれた。向こうで知り合ったフランスの学生に、授業でどんな作家を読んだかと問われてリラダンの名前を答えたたら、相手は知らなかったので残念な思いをしたという。なるほどリラダンの名は日本ではあまり知られていない。フランスでも若い世代の間ではリラダンは知られざる作家なのかもしれない。

フランスではいまでもリラダンの作品はポケットブック（日本の文庫に相当する）で入手可能である。フォリオやガルニエ・フラマリオンのポケットブックで、『未来のイヴ』や『残酷物語』を簡単に入手できる。またガリマール社からプレイヤード叢書というものが出版されていて、この叢書に収録されると古典としての認定を受けたことになる。リラダンも全2巻で全集が収められている。フランスでは決して未知の作家ではない。

余談になるが、シンガー・ソング・ライターの大貫妙子が子供たちのために作曲した歌を集めたアルバム『カミン・スーン』に「ロボット・マーチ」という曲がある。その歌詞のなかに「リラダン博士の自慢さ」という語句がある。歌手はちゃんと『未来のイヴ』を読んでいることがわかる。大貫妙子はフランスやフランス語に関心があるようで、ときおり歌詞にもフランス語が登場する。

リラダンには「孤高の作家」という呼称がぴったりである。しかし、いまの日本で、一番流行らないのが「孤高の」というものではないか。文学の世界でも、わかりやすいもの、手っ取り早いものが好まれる。リラダンのような高踏的な作家は無視されるのがオチである。したがって、残念ではあるが、日本においてリラダンはまだまだ「知られざる作家」であり続けるだろう。

聖体大祝日

—ドイツ・オーストリアの 祭りから

国際コミュニケーション学部

河野 真



世界の文化特集でのうち、もし祭りを取り上げるとなれば、ドイツ語圏では何を選べばよいのだろう。今回は、キリスト教文化という観点から、大学生の一般教養に役立ちそうなものを選んでみた。具体的には聖体大祝日を案内するわけだが、これには二つの理由がある。一つは、キリスト教の祭りといえばクリスマスが圧倒的に親しまれているが、その他はまるで見当がつかないので、祭りの面からヨーロッパの文化に触れてもらおうと考えたのである。二つ目は、聖体大祝日という耳慣れない祭りが、最近、日本でその一部が入ってきてていることにある。と言っても、キリスト教の意味ではなく、そこでの特徴的な演出の仕方が注目され、部分的に取り入れられているのである。これは最後で取り上げよう。

キリスト教の祭礼に中心に位置するのは、クリスマスではなく、復活祭である（言い方には2系統あってユダヤ教の＜過越しの祭り＞に由来する仏Pâques 伊Pasqua 露Пасха に対して、方角の＜東＞の英Easter、独Ostern）。復活の祭儀は一週間続き、＜聖週間＞と言われるが（例えば（西）Semana Santaはそれ自体が祭りの名前になっていてセヴィリアの行列祭などが有名）、中心は一週間の最後の日曜で、これを＜復活の主日＞と言う。そしてこれが、年間のカレンダーの起点になる。しかし面倒なことに、何月何日とは決まっていない。春分（3月21日）の後の最初の満月の後の最初の日曜である（ただし満月が日曜と重なるとその翌週）。したがって早い年は3月下旬、遅い年は4月下旬にまでずれこむ。そしてこれを起点にしてその後の祭礼が決まる。これから話題にする聖体大祝日の日取りは、次のようにできている。先ず、復活の主日から50日後（つまり7週間後の日曜）に、聖靈降臨

節が来る。これは5旬の意味で＜（英）Pentecoste、（独）Pentekoste、（仏）Pentecôte、＞と言う。またドイツ語では普通は＜Pfingsten＞（Pfingsten）と呼ばれる。その次の日曜が＜聖三位一体の主日＞で、その後に来る木曜が聖体大祝日である。ただし現在では、一般の人々の勤務などから、必ずしも木曜にはこだわらない。フランスでは、むしろ聖靈降臨節の2週間後の日曜が定着している。祭礼の呼び名は、英語はラテン語をそのまま使って“Corpus Christi”、ドイツ語では“Fronleichnam”（フローンライヒナム）、フランス語では“la Fête-Dieu”である。ドイツ語の“Leichnam”は＜屍＞の意だが、“Corpus”もその意味を併せ持つ。つまりキリストの身体を意味し、それはまたパンを指している。ミサにおいて葡萄酒をキリストの血、パンをキリストの身体とする教義が、特殊な祭りの形で表現されているといつてもよい。これはキリスト教の大きな祭りの中では、やや遅く13世紀の半ばに今日のベルギーのリエージュで始まったが、ややあってローマ教皇ウルバヌス4世によってローマ教会の正式の祭儀として公布され、中世末にはかなり大きな祭礼に発展していたようである。

しかし、聖体大祝日の今日の形態はその直線的な延長線上にあるのではなく、間に歴史的な曲がり角が幾つもあった。その大きなものは宗教改革で、その混乱のなかで、教会の催しでも一時途絶えたものが少なくなかった。しばらくして意識的に復興されたが、昔の伝統をよみがえらせたわけだから、勢いそれはカトリック教会の方の動きになった。

聖体大祝日が大祭礼に成長したのは、むしろ近世にはいってからで、16、17世紀には聖職者が中心の大きなパレードとなった。17世紀のある文書のなかに、そのパレードの様子が次のように記されている。

聖職者の行列が聖体を擁して進む。豪華な天蓋の四隅には蠟燭が飾られ、天蓋に覆われた聖体顯示台に聖体は納まっている。旧約聖書と新約聖書の諸人物が共に歩む。聖者伝説の場面もある。御受難、多くの悪魔、聖者たち．．．どの道にも草や薔薇が數き詰められ、新緑が懸かり、これらすべてが祭礼を称えている．．．



聖靈降臨節の行列。
特徴のある白衣とプラスバンド

に変化したとみなすのである。これを教会では聖体制定とか聖変化と呼び、毎週日曜のミサの度におこなわれる。そのパンを水晶の容器（聖体顕示台）におさめ、さらに貴人に対するように天蓋を差しきけ、それを中心に行列を組むのである。

ところで、ここで注目したいのは、今引いた古文書のなかにくどの道にも草や薔薇が敷き詰められ、新緑が懸けられ...>という件である。これは、何かと言うと、草花の花や葉を摘んで、それを路上に敷き詰めて花の絨毯をつくっているのである。実は、これが聖体大祝日の目立った演出になる。また、それについても歴史が判明している。17世紀の前にローマ教皇庁、つまりヴァチカン宮殿で働いていた庭師たちの主任はドイツ人ベネディクト・ドライ（Benedikt Drei）と言った。その人物が、1625年にローマ教皇の元祖でもあり、キリストの弟子でもあった聖ペテロの墓所の祭壇を花で埋めつくすという工夫をした。このドライの演出は大変評判になり、それを模倣した花を使った催しが各地で行なわれるようになった。そのなかで、特に聖体大祝日の際に花を使うことが定着した。

これには季節が関係している。先に聖体大祝日の日取りを算出したが、復活の主日から数えて61日後なので、5月下旬から6月下旬になる。その頃のヨーロッパは、草花が一斉に花をつける。日本よりも緯度が高いので、野山は花が一気に咲き出し、至るところにお花畠が出現する観がある。その無尽蔵の花を摘んで、聖体大祝日の行列の通り道を飾つたのである。それを特に大々的に行なったのはローマの都心から南東約25kmのジェンツァーノ（Genzano di Roma, ネーミ湖畔）の町で、今で言う町起こしでもあったのだろう。その花の絨毯を<インフィオラータ>（infiorata <(不) infiorare 花を撒く）と呼んだ。そしてこれが、ヨーロッパの各国に広まった。

もちろんドイツやオーストリアも例外ではなく、花の絨毯が各地に現れた。先の古文書の記述はそういう背景をもっている。しかしドイツ・オーストリアに本格的に広まったのは19世紀になってからだった。身辺を花でいっぱいに飾るというような感覚が浸透するのはやはり19世紀の市民社会の成熟する過程においてだったのである。なお聖体大祝日はパンの祭りであることに触れた、これも季節が重なっている。この祭りが終ると、間もなく小麦の収穫が始まるのである。

最後に、日本の話題である。最近、各地で<花の絨毯>という演出がなされている。大きなのは数年前から話題になっている長野県の善光寺参道の「花廻廊」だが、それより前から動きがあったようである。一つは、1997年に神戸の元町、穴門



行列の道筋に作られた
花の絨毯

商店街が震災後の復興のために企画した「インフィオラータ神戸」で、そのとき“infiorata”というイタリア語が取り入れられた。もう一つは、岐阜市の繁華街として知られる柳ヶ瀬通りで1998年に始められた「岐阜インフィオラータ」で、やはりイタリア中部ウンブリア州の町スプレート（Spoleto）の行事を意識的に移植した町起こしであった。その後、東京でも、サッカー・ワールド・カップを記念して新宿で企画されるなど、各地で新しいイベントになりつつある。

聖体大祝日には他にも要素があるが、今回は花フェスタにつながる伝統の面から取り上げた。なお、写真は、かなり前になるが、私が1989年5月25日にオーストリアのドイチュランツベルク（Deutschlandsberg）という町で撮った。伝統的にスラブ系の人々と接してきたが故の地名で、基礎語はドイチュラントではなく<ランツベルク>（目印の山）である。

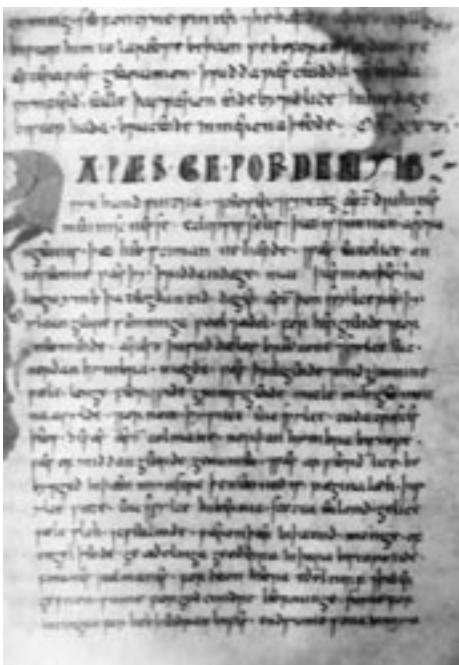
アングロ・サクソン文学における キリスト教の影響

非常勤講師

田 本 真喜子

700年から1100年間のアングロ・サクソン文学には、どの様なものがあり、それらが生じることが可能ならしめたものとして何があったか。それを解明するためには、当時のイギリスにラテン語を用いて作品を書いた作家と、母国語である英語で書いた作家及び翻訳家がいたことから話を始めなければならない。前者の代表的人物として、Aldhelm, Bede, Alcuin の三人が挙げられる一方、後者には King Alfred, Aldred, Ælfric と、参考として詩人 Cædmon について述べたい。

まず、前述したラテン語で書いた作家のうちの一人、Bede (c. 673–735) は、彼の著 *Ecclesiastical History of the English People* (英国人の協会史) を仕上げる。その古英語版は、150年位後に King Alfred の



Bede のOE訳写本

命令で翻訳されたものであるが、その最初のエディションは、Whelock (Cambridge 1643) によって編纂された。最新版としては Thomas Miller の E.E.T.S. のエディションがある。今日でも、ラテン語版の写本はイギリスのみならず、ヨーロッパの至る所で保管されている。その書では、Bede が当時のキリスト教教育において、如何に重要人物であったかを読みとることができる。彼は、7歳の時にウェアマスの修道院に入り、続いてジャローの修道に移り、そこで一生を祈りと執筆に捧げ、北部ノーサンブリアのキリスト教文化に光を灯したのであった。

英國初のキリスト教徒詩人として有名なのは、Cædmon である。彼が手がけたのは、創世記のうち Gen A と呼ばれる部分を当時の英語で (700年頃) パラフレーズしたことである。Gen A は、The Earlier Genesis、Gen B は The Later Genesis とも呼ばれる。写本は、Oxford Bodleian Library, Junius 11 (pp. 1-142) である。又、同写本にある出エジプト記、Oxford Bodleian Library, Junius, 11 (pp. 143-71) も彼による作品であるとする学者はいるが、その可能性は殆ど無い。

次に、ラテン語原文を英語に訳した King Alfred について述べる。彼は、871年に West Saxon 王国の王位についた。その時イギリスはデーン人による侵略の攻撃を受けていた。王は、英國の土地をデンマークからの侵入者達から守った。そして、その教会の改革と学問の復活を推進した。彼の伝記として、Asser による *Life of King Alfred* があるが、そのラテン語版原文を現代英語に訳したのが、サイモン・キーンズである。王が、『アングロ・サクソン年代記』を編纂させたことでも知られるが、表立って翻訳したのは、Boetius の「Consolation of Philosophy」(哲学の慰め) 等である。Fox (1864) によれば、彼は「非常に明解に説明できるように、時には意訳、時には逐語訳、即ち "a verbatim translation" を行ったとされる。

英語で作品を仕上げた三大巨匠のうち、二人目に当たる Aldred (the glossator) は、注解者として知られる。11世紀以来、Holy Island と呼ばれるようになった Lindisfarne にある修道院にて、四つの福音

書からなる Lindisfarne 写本が書き写された。全 258 folios のヴェラムから成る。この写本づくりに携わったのは以下の四人である。1) Eadfrith (本を書き写した), 2) Æthelwald (本をバウンドした), 3) Billfrith (鍛冶屋の技術をもつ), 4) Aldred (英語で注訳をつけた)。

写本の本体は710年頃に書かれたものである。前述した Bede の時代と重なるために、Bede が関与したということを指摘する声もある。Aldred の注は、10世紀後半に、ノーサンブリアン地方のチェスター・リー・ストリートの協会にてラテン語注、つまりラテン語の行間に一語ずつ書かれた。この Lindisfarne 写本のレプリカは、愛知大学豊橋校舎図書館に保存されており、今日でも授業の一部として学生に公開されている。

時代はアングロ・サクソン後期へ入り、Ælfric the Grammarian が登場する。彼はウィンチェスターのベネディクト派の修道院で教育を受ける。彼はまた、homilist (homily 作家) でもある。彼の作品はアングロ・サクソン文学において重要な地位を占めている。彼についての研究といえば、オックスフォード大学 Malcolm Godden 教授である。教授は、国際コミュニケーション学部の学部開設 5 周年記念公演に来訪し、「英語」についてスピーチをして下さった方である。彼の著、"Ælfric's changing vocabulary"における Ælfric の語の用法に関する論説から、後の研究者達が大いに学びとっている。

Ælfric は又、聖書翻訳にも携わった。Heptatuech がそれに相当するが、そのうち Gen I—III, VI—IX, XII—XXIV.22, Num XIII—XXXI, Josh (I, 1-10, XII を除く) が彼の業績に当たる。彼の翻訳において、例えば結婚に関する用語「結婚する」では、*niman, wifian, underfon, ceosan, ðeodan* などが彼の用いる訳語である。方言は後期 West-Saxon 方言、時代は11世紀である。翻訳用語として選ぶにあたって、原文における用語が伝える概念をより明確に訳として活かせるよう苦労したと見られる。

Stanton (2002) によれば、Ælfric は固い文体の宗教書を民衆によりやわらかい言葉で、つまり "sermo humilis" を用いて訳すことにより、聖書の文

体を理解させようと試みた。その背景には、同義語を慎重に操り、微妙なニュアンスを醸し出しながら、キリスト教の教えを異教扱いされないように、最善の注意を払った彼の姿がある。

結論として、アングロ・サクソン文化というものは、キリスト教研究を抜きでは考察できない。言い換えれば、アングロ・サクソン文化はキリスト教文化と言っても過言ではないだろう。



写本に描かれているミニアチャード



リンディスファーン写本のクロスカーペットのページ

なぜかわかつちゃうタイ語： 日本とタイの仏教用語

国際コミュニケーション学部

加納 寛



突然だけど、「ナーム・ター」って28回繰り返して言ってみましょう。

言ってみましたか？ そこから何かがわかったはずです。私にはわかりました、あなたが素直な人だということが。時には人のいうことを疑った方がいいですよ。

28回繰り返していない人は、疑り深い人です。もっと素直になりました。

さて、28回繰り返して読んでいるうちに、「ナーム・ター」が「なみだ」に聞こえてきませんでしたか？（「聞こえてこな～～い」という人も、疑り深い人です。聞こえろっ!!）タイ語の「ナーム・ター（ນຳໜ້າ）」は、日本語でいう「涙」にあたります。

タイ語の単語の中には、日本語と近い音と意味をもったものがときどきあります。「ナーム・ター」は、その代表。「ナーム（ນຳ）」は水で「ター（ໜ້າ）」は目だから、両方あわせて「目の水（涙）」です。これは多分偶然のなせる業ですね。ちなみに、発音は似ているけど偶然反対語になるものとして、日本語の「きれい」とタイ語の「キーレー（ຂີເລີ່ມ）」があります（「お姉さん、きれー」といってタイ人の女性に嫌われる日本人のおじさんの話がよくトリア系の番組でも登場するので、すでにご存知かもしれませんね）。

でも、偶然ではなく日本語とタイ語が似ているものも多くあります。たとえば、英語の影響が強い今日では、英語が共通の語源になっている単語があります。「ツアー」は、タイ語でも「トゥア（ຫຼວງ）」だし、「チャンピョン」はタイ語でも「チェムピエン（ເຈົ້າປະເພດ）」で通じます。ちょっとずつ違うのは、日本でもタイでも、それぞれの訛りが出来てしまうからです（ちなみに、タイ人は一般的に自分が訛っているとは思っていません。たとえ「ダブリュー（W）」が「ダッパンユー」と発音されようと、タ

イ人の英語の発音は訛っていないと自信をもっています。こういう根拠のない自信、我々も見習いたいものです）。

さて、ずっと昔、タイにも日本にも影響力をもった言語としては、インドの言葉があります。え、インドはタイには近いかもしれないけど日本からは遠いジャン、と思ったアナタ。地理的には正しいです。確かに、日本より西の中国からだって、その昔、三藏法師とその配下のサルさんやブタさんやカッパさんは、山を越え谷を越えボクラの街にもやってきて、そしてあちらこちらでこんな妖怪やあんな妖怪をやっつけながらようやくインドにたどりついたわけで、確かに距離は遠いのです。しかし、三藏法師は中国に持ち帰ったインドの経典の数々を漢字に訳し、それが日本にもたらされて私たちがよく聞くお経になっているわけで、日本とインドは中国と仏教を通じてつながっていたのですね。一方、タイにも、インドからスリランカを経て仏教が伝えられています。ですから仏教用語には、日本でもタイでも共通する単語が多く含まれています。

「釈迦牟尼（シャカムニ）」は「サーカヤムニー（ສාකච්ඡා）：シャカ族の聖者」（名古屋の日泰寺の御本堂に確かこの文字がタイ語で大書されていたように記憶しています）、「ブッダ（仏陀）」は「ブッタ（ບຸດທະ）」、お弟子さんの「阿難（アナン）」は「アーナン（ອານັນດັບ）」です。タイ語で聞いてもすぐわかりますね（タイ語で聞いてもわからない人は、きっと日本語で聞いてもわからないでしょう…）。



タイのお坊さんと本堂

また、「菩薩（ぼさつ）」は「ポーティサット（ປົກຕົວອິສຸດ）」に、「阿羅漢（あらかん）」は「アラハン（ອາຫານ）」になります。偉いお坊さん（弟子を教えるようなお坊さん）は「阿闍梨（あじやり）」ですが、タイ語では大学の先生のことを「アーチャ

ーン (ガラガラム)」といいます（私も「アーチャーン」です）。お坊さんを「比丘（びく）」ともいいますが、タイ語では「ピック（ピク）」といいます。このお坊さんが托鉢のときにもって歩くのが「鉢（はち）」ですが、タイ語では「バーツ（バーツ）」です。たまたま、「托鉢」は「タック・バーツ（タックバーツ）」になって、日本語と似ています。

悪いほうのキャラクターでいうと、悪魔の「魔」や「魔羅（まら）」は「マーラ（マーラ）」です。「魔」という漢字は、サンスクリット語の「マーラ」を訳すために中国の皇帝が作らせた字なんですって。日本語では、仏道修行のジャマになる性欲の源としての男性器を「魔羅」とといいますね。

タイの仏像はたいてい右手で下を指していますが、これはこうした悪魔（我々の中にある煩惱かもしれません）をやっつけて悟りを開かれた様子をあらわしています。ときどき寝ていらっしゃる仏像（バンコクではタイ式マッサージで有名なワット・ポーが有名。名古屋では愛知大学車道校舎から北に1kmほどの徳源寺さんに安置されています）もありますが、これはサボっているわけではなくて、お釈迦様がお亡くなりになる場面です。日本では一般に「寝釈迦」といいますが、本当は「涅槃仏（ねはんぶつ）」といいます。お釈迦様はお亡くなりになって「涅槃（ねはん）」という全ての束縛や苦から解脱した境地に入られるからです。この「涅槃」は、タイ語では「ニッパーーン（ニッパーーン）」といいます。

一方、仏陀が教えられた仏法のことは、日本語でも「達磨（ダルマ）」といいますね。インドから中国に渡られて少林寺で壁に向かって9年間もお座りになり、手足が萎えてしまわれたお坊様も「ダルマさま」で、皆さんの願い事を叶えて下さったりします（我が家にも片目だけが入ったダルマさまが何体かいらっしゃいます）。アメリカの人気コメディー「ダーマとグレッグ」の破天荒なダーマも、東洋思想に関心を持つヒッピー出身のお父さんやお母さんが仏法にあやかって命名したのではないかでしょうか。仏法である「ダルマ」は、タイ語では「タンマ（タンマ）」です。

似た発音としては、業(たいてい悪い行いの報い)を意味する「カルマ」がタイ語では「カンマ（カンマ）」になります。

あなたが悪いことをしてカルマの報いで落ちていくのは「奈落（ならく）」の底（私は徳を積んで極楽へ。さいなら～～～）ですが、タイ語では地獄のことを「ナロック（ナロック）」といいます。

こうした因縁は摩訶不思議なわけですが、この「摩訶（まか）」も、タイ語でいえば「マハー（マハー）」

です。「大きい」という意味です。摩訶不思議は、普通の不思議よりももっとびっくりするほど大きな不思議なのですね。インドの「マハラジャ」の「マハ」も同じ語源です（「ラジャ」は王様。「マハラジャ」は偉大な王様ということですね）。

三蔵法師が訳された「摩訶般若波羅蜜多心経（まかはんにやはらみったしんぎょう）」の「摩訶」も、この「マハー」です。「般若」というのは、鬼みたいなお面かと思いきや、元来の意味は「智慧」ですが、タイ語で智慧は「パンヤー（パンヤー）」といいます。一休さん（は～～～い）も「チャオ・パンヤー」（智慧の持ち主）と呼ばれています。「波羅蜜（多）」は、「バーラミー（バーラミー）」（悟りの彼岸＝涅槃の境地に到達すること）です。こう見ると、三蔵法師の訳には、けっこう音訛が入っていることがわかりますね。お経を読んだり聞いたりするときも、できれば意味がわかって読んだり聞いたりできたらいいなあと思います。

では、この際ですから、タイ語と仏教を両方勉強して、より明るく楽しく生きましょう。次の法事のとき、お坊さんと意気投合して親戚中のスターになるのは、君だ!!

（念のための注意：タイ語を履修したからといって仏教が強制されることはありません。イスラム教徒やキリスト教徒のタイ人だっていっぱいいますし。フランス語やドイツ語を履修したからといってキリスト教が強制されないのと同じです。キリスト教徒やイスラム教徒（愛大生にいるのかな？）や他の宗教の方も、安心してタイ語を履修して下さい。待ってるからね。）



タイのお寺の門

仏誕節から見たアジア

国際コミュニケーション学部

片 茂 永

今の日本の若者にとって、仏誕節はあまりなじみ深い言葉とはいえない。もっと正確に言えば、戦後の日本人にとって、と広げて言ったほうが適切かもしない。わざわざ戦前と戦後を言い分けたのは、戦前の日本人にとって仏誕節はなじみが薄いところか、とても関心の高いお祭りの一つだった、という意味が含まれているからだ。戦後のG H Qの政策や仏教色は日本固有ではないからという理由であえて排除したかった柳田国男の固有論などをここに持ち出す暇はないが、とにかく、アジアの共通文化の一つである仏誕節をとおしてアジアを話すのが日本ではますます困難になってくることについて、私は残念に思っている。だからといって、クリスマスやバレンタインデー、ハロウィンのような得体の知れないものからアジアが話し合えるようになったことについて戸惑うことはないが、でもなにか寂しい。

戦前の一時期、仏誕節は例えば東アジアは一つの文化を共有しているのだ、ということが共感できた唯一の祭りでもあった。日本政府も物心両面からの



2005年仏誕節を迎えてソウル市内を練り歩く燃燈行列の光景

支援を特に惜しまなかったが、それは戦前の東アジアの人々が日本とともにいることを確認できるわずかな時間だったからである。その共鳴はいま途絶えていて、仏誕節を迎えてもアジアは日本に関心が薄く、日本から発せられるアジアへの関心もやはり薄い。これがまた、日本の5月のゴールデンウィーク明けごろからアジアは一斉に騒ぎはじめるから、日本人にとって見れば絶妙にアジア的祝祭の場から遠ざかる結果になっているのである。

そんな中、イギリスの後押しにより、スリランカがUNを舞台に長年訴え続けてきた、仏誕節(Wesak)の国際祝日化が2000年度からやっと実現された。それと同時に中国は旧暦の仏誕節が残っている国々及び東南アジアに国際会合を呼びかけ、その実現も近い。ところが、このような宗教的動きのなか日本はいまアジアのほぼ圏外に置かれており、さらに日本佛教界は西暦仏誕節にこだわり続けていて、一ヶ月余りの時間のずれ、つまりアジアとの足踏みにも影響を与えている。

とにかく、現代アジアの仏誕節には、いまの日本人の予想をはるかに上回るものがある。現代になったからやたらにスケールだけ膨らんだとかの意味ではなく、もともとのお祭り騒ぎのままであって、いまの日本から見れば眼を見張ることがあるかもしれない。60年余りの年月は佛教面において日本とアジアにこんなにも距離感をもたらしてしまった。

例えば韓国では、いまなお戦前と変わらない光景が繰り広げられ、旧暦の四月八日が近づくにつれ国中は徐々に祝祭ムードに包まれる。戦前の東京で見

られた風景に似通う要素もあって資料的価値も高い。まずソウル市内を午後から練り歩く数万人の入波、式典の模様、お祭り気分を醸し出す様々なシンボルや芸能、手提げ提灯をはじめとする大小色とりどりの燃灯に埋め尽くされた夜景、前夜祭での歓声などなど。いまも面影を残している日本の仏誕節では甘茶が目玉ならば、韓国の場合燃灯がそれにあたる程度の差があるだけだ。とにかく3日間程度のお祭り騒ぎは、佛教色が伝統芸能大会的な雰囲気に圧倒されるぐらいの、いわば総合文化祝祭にな

っている。これに親近感を寄せていた戦前の日本人と、違和感を感じるようになつたいまの日本人の二つの顔を思い浮かばざるをえない。

中国の仏誕節における習俗には地理的に近い韓国よりむしろ日本とダブる部分が多い。特に浴仏がその一つである。日本人の浴仏と浴仏水としての甘茶に寄せる心意は尋常なものではなく、それが中国人と酷似しているのだ。甘茶が誕生仏を触れたことによって聖化されると信じることから、浴仏水を大事にする具体的な習俗にいたるまで、まるで一枚絵のように映る。なかでも浴仏水を飲んで福を期待する心意が中国人と日本人に重なるのは興味深い。あるいは浴仏水で墨をすって字を書くと、その字に靈力が付着すると信じる日本の民間信仰と、浴仏水は魔よけに良く効くと信じる中国人の民間信仰との横断面は一つの根本から派生したことを証明してくれるいくつかの証拠もある。またその横断面は、重なりあう段階と段階を示していて、『正月の来た道』で大林太良が強調した新年水や水汲み習俗ともめぐり合う。さてこうなると、今度は再び韓国の玉水信仰が中国と日本を繋ぐ上で欠かせなくなるから、文化の連続非連続はまさに止まることを拒む。

さて、広大な中国であるだけに今の内容はとりあえず漢伝佛教圏に限るべきで、チベットをはじめとする藏伝佛教圏や雲南の南伝佛教圏になるとまた別の話だ。聖地巡礼の期間であったり、正月だったりするから、今までの漢伝佛教圏とはだいぶ趣が異なってしまう。逆にいうと、日本と韓国における仏誕節がすでに中国文化に土着化されかつ定型化された仏誕節をほぼそのまま受入れた痕跡が濃厚である反面、チベットや雲南、そしてその以南からはその強い地域性を示す仏誕節に出会うことになる、という意味であろう。

仏誕節にみられるアジアの普遍を横目に、地域ごとの特性を追うのは文化研究の大きな楽しみである。しかし、この楽しみは普遍性と地域性との均衡が崩れた場合には国家文化や自文化、他文化など余分な力が入った区画整理をしがちなので、常に注意を怠ってはいけない。虹の七色、というふうな人間の錯覚がさらに自己の束縛と矛盾を強めていくように、仏誕節における地域性を余計に固定しなくてもいい。このような点からも、北京でみられる四月八日の澆

水は南に行けばいくほどだんだんと強まり、雲南省から以南の澆水は儀礼と遊びとの境界線が曖昧になつてしまつ。さらにタイなどでは、宗教儀礼としてより水掛け祭りが示すように、遊びや観光資源としてもっと有名になったふしもある。

ところで、この辺で降りてくると浴水をめぐる儀礼が増える一方、いつのまにか漢伝佛教圏の要素が一つ一つ減ってくることに気づかざるをえない。ところが、普遍がある以上、断絶されることはない。しかし東南アジアの地域性をあえて挙げれば、何と言つても生きた象の登場が増え始めることだろう。一気に増えるというより、徐々に増え始め、スリランカにいたれば、仏誕節の目玉は象が占めるほど、象はこの儀礼の中心であり神のシンボルでもあり、場合によっては人間より大事にされる。

さて、この辺で再び日本を振り返ってみれば、面白いことに、日本の仏誕節にも象が登場することだけは認めざるをえない。ただ、紙や竹などでつくられた小さくて可愛い模型の象だから、これはちょうど幼稚園の園児に似合いそうなちょっと大きなおもちゃの感覚として。そういうえば、これぐらいの変形を通してアジアを見渡せば、韓国、中国など東アジアのすべての国々に模型の象が仏誕節には欠かせない。このような連続と変形の果てにある日本を見るのである。

でもいくらアジアと日本との連続性を強調しても、今の日本人にとって仏誕節がなじみの薄い祭りであることにはあまり変わりはない。そんな中、東京の増上寺が仏誕節を再び国際色の豊かな祭りに打ち上げようとする動きを見せていて、興味をそそる。こんな趣味を持っているのは多分私ひとりだけかもしれないが、でもいくらバレンタインデーやハロウィンが面白くとも、アジアとの佛教的普遍性というか、むかしからの連続性にも関心を寄せていただきたい。そうすることによってはじめて、歴史性からのアジア的安定感と、絶えることなく寄せてくる全世界的多文化との狭間で、新しい自己創出の土台が設けられるのではないかと思っている。

良寛に想う

国際コミュニケーション学部

稻垣 不二磨

良寛に

形見とて何か残さん春は花

山ほととぎす秋はもみぢ葉

という歌がある。これは、彼の辞世の句であるという。彼は出家者であった。家族はない。しかし、彼をしたう弟子や友人は多くいた。歳をとった良寛は、それらの人びとに何を形見として残そうかと思案したことであろう。しかし、よくよく考えてみるとその必要はない。春になれば花が咲き、夏になれば山にはとどぎすが鳴き、秋になれば木々が紅葉する。そういう世界が現にあり、一人ひとりがそういう世界の中に生かされている。その上に、何をこざかしく形見を残そうとするのであろうか、と詠っているのである。大きなものに身を託したやすらぎがよく詠われている。この歌は、日本人の自然観をよく詠っているものとして、多くの人びとによってとりあげられている。

この歌にはもとになっている歌がある。良寛は曹洞禅の修行をし、生涯その道を歩みつけた人である。曹洞宗の宗祖である道元に対しては生涯、深い敬慕の念をいだいていた。その道元は、「本来の面目を詠ず」と題して、

春は花夏ほととぎす秋は月

冬雪さえて冷（すず）しかりけり

と詠っている。

「本来の面目」とは、ものごとの本来のすがた、ということである。悟りの世界をいう。われわれは、

日常生活において自分の思いで生きようとしている。しかし、そこで生きられている世界は、自分が作り出した世界であって、本来の面目ではない。身心へのとらわれがある限り、本来の面目は現前しない。身心へのとらわれが破られたところに、本来の面目は現前する。道元は、

自己をはこびて万法を修証するを迷いとす
万法すすみて自己を修証するはさとりなり

と述べている。（『正法眼藏・現成公案』）その悟りの世界を詠ったものが、上の歌である。この歌がもととなって、良寛の歌は詠われている。

両者ともに同一のことを詠っているのではあるが、同時にそこには異りもある。道元は、非常に厳しい修行をした人である。彼は、当時の日本の仏教に満足することができず、中国に渡り、如淨禪師のもとで禪という当時中国に興りつつあった新しい仏教を学ぶ。帰国に際して師の如淨は、道元に「国王・大臣に近づくなれ。ただ深山幽谷に居して、一箇半箇を接得せよ」という言葉をおくった。権力のある人びとと交わることなく、深い山、人里を離れた谷に住み、一人でもいい、半人でもいい、真の仏法者を育てよというのである。彼は、その言葉に従つて、越前の山奥にこもり、修行に専念した。現在の永平寺は、道元の修行の故地である。

道元の歌には、非常に厳しいものがうかがわれる。それに対して、良寛の歌には、すべてのものをつむむような柔らかさがある。おののの人の人柄によるのであろう。道元は「身心脱落・脱落身心」（身心へのとらわれを脱落せよ、身心へのとらわれが脱落したとき、眞の身心の働きが生ずる）と言い、良寛は「騰々任天真」（騰々として天真に任す）と言う。同じところを目指しながら、そこにはおのずから各々の人となりから出た違いがある。

文政11年（1828）、良寛71歳の時、三条を中心として越後に大きな地震があった。死者1607名、倒壊家屋1万3千余であったという。その時、彼は、友人の山田杜臯にあてて次のような見舞状を送っている。

地震は、信(まこと)に大変に候。野僧、草庵は
何事もなく、親類中死人もなくめでたく存じ候。
うちつけに死なば死なずて永(なが)らへて
かかる憂きめを見るがわびしさ
しかし災難に逢ふ時節には災難逢ふがよく候。
死ぬ時節には死ぬがよく候。是はこれ災難をのが
れる妙法にて候。 かしこ。

最後の文章は、どのようなところから言われたものであろうか。よもや死や災難をかなたにながめ、傍観者としてそれらについて語っているのではないであろう。佛教者としてのぎりぎりのところから語り出されたものであろう。

良寛はこの地震について一つの漢詩を残している。
(今は、書き下し文で示す。) 地震の悲惨なありさまを詳しく述べることから始まり、それをうけて

四十年一たび首を廻らせば
世の軽靡に移ること信に馳するが如し
況んや太平を怙(たの)んで人心弛み
邪魔党を結んで競うてこれに乗ず
恩義頓に亡滅し
忠厚更に知るなし
利を論ずれば毫末を争い
悟道も徹骨の癡のみ
己を慢り人を欺くを好手と称し
土上泥を加えて了期なし

と詠っている。

そこでは、その当時の世のあり方が深くみつめられ、それに対する悲憤とも言うべきものがよく詠われている。「利を論ずれば毫末を争い…己を慢り人を欺くを好手と称し…」というあたり、今日のあり方そのものを言っているのではないかろうか。

そして、「このたびの災禍なお遅きに似たり」と言い、災禍を機縁として、自らのあり方を深く省みるべきであって、いたずらに他の人を怨んだり、天を咎めたりしてはならないと結んでいる。

災難や死に対する対応の仕方に二つあるように思われる。一つは、それらが来ないように求めるこ

であり、もう一つは、それらを機縁として自らのあり方を深く省みるというものである。

今日とられている多くの対策は前者である。われわれは、予想される災難に対しては備えをしなければならない。災禍を最小限にとどめるようさまざまな努力をしなければならない。たしかにそうすることは大切であるが、しかし、備えさえすれば、災難をさけることができるというものではない。予想を越えた災難に出会うこともある。第一の対応の仕方には、おのずから限界がある。

良寛の場合は後者である。「災難に逢ふ時節には災難に逢ふが候。死ぬ時節には死ぬがよく候。是はこれ災難をのがれる妙法にて候」という発言の中には、禪の修行者としての良寛の面目が躍如としている。

今日、多くの人びとが良寛をとりあげている。毎年かなりの数の著作が出版されている。時代が難しい問題に直面すればする程、良寛のことが真剣にとりあげられるように思われる。良寛の中には、今日のわれわれの在り方を根本的に問い合わせせるものがある。

今日、科学技術の進歩によってさまざまな可能性が開かれてきたし、これからもさらに開かれていくであろう。かつては不可能であった多くのことが可能になっている。そうして、いわゆる豊かな社会が実現されつつある。それは、近世初頭の思想家であるフランシス・ベーコンが「知は力である」と述べているとおりである。

しかし、そこにはわれわれの存在を外側からも内側からも脅やかすような深刻な問題が現われてきて いる。人間の存在を根本的に問い合わせることが求めら れている。良寛の生き方の中には、そうしたことへ の多くの示唆が含まれているように思われる。



張愛玲と都市文化

経済学部

桑島由美子



—映像に蘇る上海ノスタルジアの極致—

二十世紀から今日に至るまで、「上海人」「外国人」「外地人」がそれぞれのコミュニティを形成し、モザイクのように中西雜居する、国際都市上海…。日中戦争当時、香港大学の学生であった張愛玲（1921-1995）は、香港陥落後、上海の聖ジョーンズ大学に転学するものの、事実上学業を断念し、エッセイや連載小説の執筆で生計を立て始める。1940年代の上海文壇にデビューした時、張愛玲は僅か23歳だった。このころ亡国の危機に直面しながら、中国の近代文学、とりわけ出版メディア先進地である上海の文壇は、漸く成熟期を迎えていた。伝統的な才子佳人の恋愛譚を借りた欧化通俗小説は、瞬く間に都市読者層の心を捉え、ここにおいて近代中国にはじめて市民文学が生まれたとさえ言われる。汪精衛政権の宣伝省次官であった胡蘭成との恋愛、結婚という背景もあり、建国後中国の文学史からは抹殺され、今日でも微妙な位置づけにあるが、その後も「記憶」と上海ノスタルジーの文学として国境を越えて読み継がれていった張愛玲の小説は、二十一世紀に入ってからも、映画や舞台の題材として、その清新さを失っていない。

張愛玲は、多くの文学作品の他に47年から60年代にかけては、（主に香港を舞台に）多くの映画脚本を書き下ろしているが、最近の映像文化との関わりについて見れば、2003年には劉若英、趙文瑄主演の伝記的ドラマ『她従海上来』（全20回）が放映され、その映像には台湾における張愛玲への思い入れの深さが伺える。近年の香港映画では、許鞍華『傾城の恋』が、97年の中国返還に向けて、香港人アイデンティティの問題を突きつけたと言われ、



「赤い薔薇 白い薔薇」左からウィンストン・チャオ、ジョアン・チェン

また閻錦鵬『赤い薔薇 白い薔薇』は緻密な脚色の中に原作のニュアンスを巧みに織り込んでいる。その他に映画『半生縁』があり、今年、首都北京では香港話劇団による舞台『傾城の恋』も話題となった。『色、戒』については台湾出身の監督李安が早くから映画化を企画していたとも言われる。85年の雪解け以来、いまだに熱狂冷めやらぬ、張愛玲をめぐるこれらの文化現象は一体何を物語っているのだろうか。ある意味で張愛玲は、近年の若手作家を凌駕するほどに「今日的な」作家と言えるのかも知れない。

—欧化と近代化の中で「女性化」された大衆文化—

「張迷」「張學」という言葉さえ生まれ、張愛玲についてはすでに多くが語り尽くされてきたように思う。私が最初に出会ったのは錢理群氏の次の叙述である。

「中国現代文学の全体像からは、1944年に出版された小説集『伝奇』とその作者張愛玲はつねに一つの「例外」とされてきた。彼女の特色はある種周縁的な語りのスタイルを打ち出したことがある、という人もいる。戦争が彼女にもたらした「何もかもが曖昧で、縮籠もり、寄る辺ない」感覚に、また「もっと大きな破壊が必ずやって来て、いつの日か私たちの文明は、それが昇華しようと、浮薄となろうとも、必ず過去のものになる。」という感受性に忠実に、彼女は一切のユートピア的彼岸の幻想を拒否した。戦争中、人々が少しでも確かなものにしがみつき、真摯に生きてきたという事実は更に彼女が人生の此岸を把握し、「凡人は英雄よりはるかにその時代の力量を表す」という歴史観の形成に啓示を与えた。

ここにおいて四十年代の中国文壇は、戦争ロマン主義の理性の光輝のもと、多くの悲壯な戦争文学を得たと同時に、この「寂しげな別れの手振り」をも併せ持つのである。多くの新文学の作家が、通俗文学に対して、それを蔑んだのと対照的に、むしろ彼女はその背景としての上海商業文化（海派文化）や通俗文学について、好んで語っているほどである。最初人々は誰もが、海派の通俗作家とみなしていた。しかし真摯に彼女の作品を閲読するならば、彼女が晚清士大夫文化が衰微する中、その最後の伝承者であり、上海通俗文学の才女と呼ばれた彼女が、内に秘めた筆墨趣味、生来の感受性によって、眞のモダニティを表現し得たということを認識できよう。張愛玲は全く自覚的に、また自由に「伝統」と「近代」、「雅」と「俗」の間を行きつ戻りつ、両者の均衡と疎通に達したことがその特徴であり、現代中国文学に対する主な貢献でもある。」（錢理群『彩色図版中国文学史』より）

ところで近代都市上海の風俗を描いた写実派・現代派の作家は少なくないが、眞に成熟した都会人の意識や感情の機微を表現し得た作家が、果たしてどれほどいるだろうか。一方で欧化された都市文化に身を置きながら、知識人が挙って「崇洋（西洋崇拜）」に向かっていた時に、彼女は、その趣向において土着文化・伝統文化（地方戲や章回小説の類）への強い愛着を示し、流入する西洋文化に対する批判的言辞にも事欠かなかった。フランス文学の翻訳者として著名な傳雷が「張愛玲の小説は『金鎖記』の他に見るべきものなし。文章は六朝の駢儼文のように珠玉の輝きを放っているが、内容と思想は空疎だ。」と酷評したのも、多くの批評家を呪縛していた規範と価値観（としての西欧近代）を象徴しているように思える。張愛玲の文章は近代西欧小説の心理描写と伝統小説の技巧を融合し、一見西洋的な衣装を纏っているながら、情緒的には常に伝統文化との馴染を断ち切ろうとはしなかった。自ら背後に「漠然とした脅威」を感じていたと語る彼女の意識には、今日急激な都市化、無国籍化に揺れる、現代中国の文化アイデンティティの問題が重なって見えてくる。自國の文化や民族誌のディテールを描くことへのこだわりは、どのような意味を持っていたのだろうか。

周蕾『女性と中国のモダニティ』（2003年）によれば、五四新文化運動に始まる中国の思想解放運動は、同時に「女性化された」大衆文化の破壊であり、新文学の担い手であった近代知識人は、清末小説の興隆に見られる大衆文化と、当時の文化現象に対して冷淡かつ「保守的」だったが、この男性エリート主導の「新文学」こそが正統かつ文学史の主流と規定された。一方で張愛玲文学の起源とされる清末小説——頽廃的な文言で綴られる極彩色の民俗誌——のような「女性化された」大衆文化と、通俗文学における女性の表象は、ジェンダーのみならず、文化の解釈に深く関わっていると言う。また自国の文化に対するある意味エゴチックな視点、他者としての措定は、民族が歴史的危機に直面したときの意識の表出であるという。



—現代文化とファッション・服飾研究—

このところの張愛玲関連の出版物を見ると、上海の建築物や、広告、演劇、写真集、自作の挿画までが、表象文化研究の対象となっている。散文集『流言』では、京劇、音楽、絵画、ダンス、宗教、服飾への関心が語られていて、小説との関連も興味深い。

張愛玲の服飾への偏愛は、中国伝統文化への矜持や家庭環境の影響によると言われているが、自ら旗袍や清代貴族の衣装を纏って新刊本の宣伝写真を撮ったり、当時としては斬新な、メディアを介しての自己演出は人目を引く。しかし、作品中に書き込まれた服飾の微に入る叙述は、單なる当世風の文化・風俗のスケッチではなく、人物の背景や心理・人格までをさりげなく投影した描写になっている。女性の運命の陰惨さ（『金鎖記』）、平凡なインテリ女性の心理的葛藤（『封鎖』）婚姻の白々とした空虚さ（『赤い薔薇白い薔薇』）等々まで彼女の言によればすべて、容姿や衣装、アクセサリーや髪の結い方、立ち居振る舞いによって「言葉より雄弁に」表現し得るのだろう。以下は上海の市電に乗り合わせた二人の男女の描写である。

「彼女は見たところクリスチャンの若奥様みたいだが、まだ未婚だった。着ているのは白いキャラコの旗袍で、幅の狭い藍色の縁取りが縫い取られている——濃い藍色に白、まさに計報の趣きだった。手には藍色に白のチェックの小さな日傘を持っていた。髪は無難なスタイルに結い、公衆の注意を喚起しやしないかとそればかりを気にしている。とはいって、彼女には実際目立ちすぎる危険性など微塵もなかった。……宗楨と翠遠は突然、二人はまだ初対面であることに気づいた。宗楨の眼の中では彼女の顔はまるでさりと描かれた白描（東洋画の技法）の牡丹の花のようで、髪のあたりに乱れた二、三の後れ毛は、さながら風の中の花蕊だった。」（『封鎖』）

彼女の服飾への関心には、香港大学時代の恩師で宗教学者でもある許地山の影響が伺われる。許地山は燕京大学卒業後、ハーバード大学とケンブリッジ大学で比較宗教学を、インドではサンスクリットと仏教学を修めた宗教学者で、五四を代表する作家としても知られるが、香港大学では宗教学のほか、文学史と服飾史を講じていた。青年期の許地山は衣服のデザインも手掛け、服飾に関する書画印影本・人物木刻画像・写真などを収集していたと言われる。1935年天津『大公報』『藝術周刊』に『近三百年來底中国女装』を連載、また後には『中国服飾史』を著している。張愛玲は1943年上海の英文雑誌『二十世紀』にエッセイ“Chinese Life And Fashions”を寄稿している。同じテーマを中国語に改めたのが、同年12月雑誌『古今』に掲載された散文『更衣記』であるが、そこでは清初から民国に至る社会変動の過程で、中国人の心理に生じた変化が、女性の衣装や化粧法の変遷に集約されて語られている。民俗文化の心性史への深い関心、極彩色に彩られた描写のディテールが織り成す「表層の力」において、張愛玲の小説は近年の文化理論にも大きな示唆を与え続けている。



「留学生が『お客さま』にならない」講義の取り組み

非常勤講師

鈴木常勝

「留学生はひとたまりになっていて、自分たちだけで閉じこもっている」と日本人学生が言えば、留学生は「日本人学生に話しかけにくい」「私たち留学生と日本人学生の間には、共通の話題がない」と訴える。これらの声は以前から私の耳に聞こえていた。互いにカラを作っていて、対話がはずまないようだ。

留学生の立場からすれば、せっかく留学して来たのに、同世代の日本人大学生と友人になれないのは、何としても惜しい。また、日本人大学生にとって、まわりに大勢の留学生がいるのに、彼らから直に外国文化を学ぶ機会を作らないままいるのは、非常にもったいない。

1、「中国人留学生との会話」から生まれたもの

私は毎年、中国語の授業で「留学生との会話」を課題に出している。受講生に中国語を使う場を与えることと、留学生と友達になることをねらいとしている。友達付き合いから、相手国の人や文化が好きになるのが、文化交流の土台だ。受講生は「自分の中国語が通じた喜び」「発音の誤りを指摘してもらったありがたさ」「熱心に会話の相手をしてくれたことへの感謝」などをレポートに記している（受講生の感想文は『愛知大学一般教育論集第21号』掲載の小稿「《中文授業書》の試み」に多数載せた）。

留学生の側から見た「留学生との会話」の意義を考えてみよう。

「中国語で話す彼らはうれしそうだった」「喜んで、中国語会話の相手になってくれた」という日本人学生の体験談は、この出会いが留学生にとっても歓迎されていたことを示している。

「今まで友達として日本語で話していたが、中国

語会話の時の留学生の顔がまるで違って生き生きとしていた」「中国語で会話する時、留学生は日本語で話す時より堂々としていた」という感想からは、「日本の大学で学ぶ」だけでなく「日本人学生に教える」役割を持てたことに、誇らしさと喜びを感じている留学生の表情が想像できる。

2、留学生が提案し、実行したこと

私のもうひとつの担当科目「現代アジア事情」で、ゲストに中国琵琶の演奏者・涂善祥さんを招いた時のことを見よう。涂さんは、喜多郎と何度も共演しているキャリアの持ち主で、私の上海留学時代の親友だ。私も留学中に涂さんから中国琵琶を学んだが、残念ながら未だに名演奏家になれないままだ。

涂さんは、受講生の韓国人・中国人に配慮して朝鮮歌曲「アリラン」や中国古典曲を弾き、日本学生のために「さくら」や西欧名曲「アルハンブラの思い出」を演奏してくれた。涂さんは「日本留学時代に八百屋で働いていて、大切な指をケガしたこと」などの苦労話をして、留学生たちの共感を呼んだ。そして、「みんなで歌おう」との涂さんの呼びかけに応え、日本人学生は涂さんの伴奏で「ふるさと」を歌った。

その後、一人の中国人留学生が前に出て「中国人も自らの姿勢を示そうよ」と同胞に呼びかけ、中国国歌「義勇軍行進曲」—「起て、奴隸になることを拒む者たちよ」を歌い出した。もちろん涂さんも喜んで伴奏した。日本人学生は国歌を歌う彼らの熱気に圧倒されて、驚いた表情を見せた。ここで彼らは日本人学生に中国の歴史と文化を伝える主体性を見せた。その姿勢がいさかナショナリズムの色合いが濃いとしても、私は彼らが自ら提案し、実行したことに感銘を受けた。

3、パーティでの友達づくり



涂さんの伴奏で中国国歌「義勇軍行進曲」を合唱する中国人留学生たち

05年度の「現代アジア事情」の最終講義は、生協食堂での交流パーティだった。「現代アジア事情」の講義テーマが「日・中・韓の現代史認識」であり、友達付き合いの中から気軽にそのテーマを語り合える場の設定を意図して、パーティを開いた。私も着物を着て司会をつとめた。大サービスのつもりだ。

百人近く集まった受講生をゲームに巻き込み、互いに「1分間インタビュー」を行った。「1分間インタビューで友達ができた」という体験が留学生からも何通もレポートとして提出され、友達づくりのもくろみは達成されたようだ。日本人学生から留学生向けの「日本文化、観光地の紹介」の時間もあり、お茶とケーキで互いの雑談の場を作った。



北京の公園で中国の子ども相手に日本の紙芝居実演
(筆者の中国留学時代・北京の公園にて)

4、主体性と双方向を意識して

留学生と日本人学生のカラを破る取り組みは、相互に教え学び合う「双方向性の学習」の実現であると共に、「留学生の主体性を生かす」結果になっている。留学生が「学ぶ側」にとどまらず、「教える側」に立つほどに、彼らにとって日本留学の価値は高まる。また、教えようとする留学生の姿勢が、日本人学生の学習意欲に強く刺激を与えたことは、「留学生との会話」の感想文から読み取ることができる。

近く見れば、愛知大学での留学生と日本人学生の友達づくりのために、大きく見れば世界文化交流のために、「留学生の主体性を生かす」「双方向性の学習」が、講義においても自覚的に取り組まれる必要がある。

聖書と英語

～一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし。
ヨハネ伝12章24節～

経済学部
葛 谷 登

わたくしはその昔、大学の教職課程で高校英語教員二級免許を取りました。卒業時には某地方自治体の採用試験にも神様のお情けで合格させていただきました（最終的にこちらの一方的な都合で辞退）。大学四年のときに文部省国際交流制度によりインドのネルー大学に1年ほど留学し、英語を公用語として自在に操るインドの学生と寮で起居を共にしました。それより前、大学の専門課程では、小田島雄志と共に西川正身の門下に列し且つ米国黒人文学が御専門の斎藤忠利先生（岩波文庫のシンクレア・ルイスの『本町通り』の訳者）のゼミに一時参加し、デュボイスの『黒人のたましい』（*The Souls of Black Folk*）の一部分を読む機会が与られました。

斎藤先生はバプテストのキリスト者で、牧師になるためのコースも修了されたそうです。先生はことあるごとに、英文学と聖書の密接な関係を力説されました。曰く、「昼は雲の柱、夜は火の柱」という表現は旧約聖書の出エジプト記に出て来る言葉です。曰く、マタイ6の24に「汝ら神と富とに兼事ふること能はず。」とあるけれども、アメリカ人は神と富とに兼事ふる民です、…等々。以上、当時は何気なく聞いていた言葉の重みを最近になってようやく感ずるようになりました。わたくし自身、教会の末席を汚し、聖書をほつぼつと読むようになったからでしょうか。

英文学を専門としないわたくしが「聖書と英語」について語るのを躊躇しますが、実生活の中で聖書と英語はわたくしにとって大きな意味を持つようになりましたので、わたくしの狭い生活空間の中で折に触れて感じたことなどもについて述べることも、言葉とその背後にある世界に心を寄せる人たちに何が

しか提供出来るのではないかと憶断し、馴文を綴るしだいです。

わたくしは大学二年のとき、畏友の古久保俊嗣君に、「最近、僕は或る本を読んで三木清の言葉に大いに感銘を覚えた。『一粒の麦、…。』がその言葉だ。」と誇らしげに語りました。すると、彼は即座に、「それは聖書の中にある言葉とちゃうか。」と問い合わせ返しました。友人は大阪出身で洗練された都市文化の空気を吸い、プロテスタントの嚴君とカトリックの慈母の両親から薰育を施されました。彼自身はキリスト者ではありませんが、キリスト教の世界は尾張の浄土真宗の百姓を実家とするわたくしに比べずっと肌近くにあったことでしょう。わたくしは返答に窮しました。いうまでもなく、この言葉は三木清の言葉ではなく、聖書の中の言葉、しかも欧米のキリスト教国では誰もが知っているはずのあまりにも有名な言葉です。日本においても一廉の教養の持ち主の間には周知のこの言葉を田舎者のわたくしは知らないかったです。

三木清は西田幾太郎の門下の哲学者で、戦争末期の1945年に治安維持法違反の容疑で検挙拘留され、終戦になっても釈放されることなく、その年の9月26日に獄死しました。権力の檻の中でなすすべなく意味のない死を強いられた三木清の遺稿は未完の『親鸞』でした。わたくしは中学生の時に英文学者本多顕彰の『歎異抄入門』（光文社）を読んだあと、出だしの「三木清の奥さんが亡くなった日の夕方お悔やみに行くと、うす暗い仏間の仏壇のまえでお経をあげている坊さんの後ろに西田幾太郎博士と三木清が並んで端座していた。」（三十四頁）という文章が心に残りました。彼は独仏に留学し『バスカルに於ける人間の研究』を著やすなど、西洋思想を頭と体の両面で経験しています。とはいって、その彼の内面の支柱の一本が聖書の言葉であろうなどとは夢想だにしませんでした。今となっては、三木清と「一粒の麦」について言及した書物の名を思い出すことは出来ません。わたくしの読み違いであったのか、或いは著者自身も言葉の由来を知らなかったのか確かめるすべもありません。ただ親鸞の思想に心の錨を下ろしていたように思えた三木清の内面に聖書の

言葉が深く刻み込まれていたことに微妙な衝撃を覚えたことは今でも昨日のことのように心に蘇ります。

わたくしがこの言葉の出所を知ったのは、インドでの留学から帰り、卒業する前年に、神様のお情けにより主の聖餐に陪することを許され~インド留学の折、英文で推薦書を書いてくださった齋藤先生は、どこからかこのことを伝え聞いて祝福の言葉をくださいました~少しづつ、聖書を読み出してからのことです。拍案驚喜の体験でした。

やがて日本語の聖書だけでなく、英語の聖書を、その中でも欽定訳聖書に目を走らせるようになりました。たまたま荻窓の待晨堂というキリスト教関係の本屋さんで欽定訳の廉価な古本を見つけ、齋藤先生が昔、授業で欽定訳聖書を読まれていたのを思い出し購入したのが機縁です。

欽定訳聖書を少しづつでも読み進めて行くにつれて、聖書の世界と欧米の思想とがそれこそ光と影の関係にあることに気づかされて行きました。日本では『諸国民の富』とか『国富論』と訳される *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations* という有名な十八世紀の英国の経済学者アダム・スミスの大著があります。表題の一部の ‘the Wealth of Nations’ は ‘the wealth of nations’ という形で旧約聖書中の聖書とも言うべきイザヤ書の60章5節や61章6節に出て来る言葉でもあったのです。文語訳では「もろもろの国の貨財」や「もろもろの国の富」、口語訳では「もろもろの国の宝」や「もろもろの国の富」、新共同訳では「国々の富」と訳されています。

日本語の聖書の言葉からアダム・スミスの大著を連想することは不可能に近いでしょう。しかし英米人が ‘the Wealth of Nations’ という書名に接すれば、イザヤ書の中の ‘the wealth of nation’ という言葉を想起せざるを得ないでしょう。しかもこの聖書の箇所は欧米では待降節によく読まれるところであって、聖書の中でも特に親しまれている箇所の一つであると思われます。何よりも特徴的なのはここでは富が神に呪われたものではなくて、神に祝福されたものとして取り上げられていることです。

スミスのこの大著は1776年に著わされています。

この年は米国で独立宣言が発せられた記念すべき年でもあり、英国では中世の封建体制が完全に崩壊し、産業革命が大規模に展開し、機械制大工業のもと富が拡大再生産され、近代の資本主義体制の足場が固まった年でもあります。中世から近代への完全移行の年と言えるかも知れません。富が算術級数的に単純生産されるのではなく、幾何級数的に拡大再生産されるように社会構造の大転換を見たのです。その富の生産の構造的变化を、スミスは神の祝福と受けとめ、聖書の言葉を自分の著書のタイトルの一部に使用したのではないでしょうか。富は、中世のようにもはや高利という不正な手段によって得られるものではなく、産業革命によって発明された機械を媒介として勤労によって正当に得られるものに変質したからです。スミスは英國の宗教改革者ジョン・ウェスリーとほぼ同時代を生きた人物です。スミスは M.ヴェーバーに先駆けて「プロテスタンディズムの倫理と資本主義の精神」の問題を社会科学的に追求したように思われます（参考：高島善哉『アダム・スミスの市民社会体系』岩波書店）。ただスミスはやがて欲望の肥大が科学の進歩を凌駕して行く近代の悲劇を洞察出来なかったのではないかでしょうか。

ほかにも英語の聖書を読み進んで行く途中で予期せぬささやかな大発見を経験します。‘redemption’（贖い）という言葉などがそれです。それはキング牧師の「私には夢がある」という有名な演説の中に “Continue to work with the faith that unearned suffering is redemptive.” という一節にも形容詞の形で出て来ます。これはキング牧師の演説の隅の親石のように思われます。つまり、いわれなき苦しみ、一見無意味と思われる苦しみにも意味がある、それは十字架上のキリストの贖いの業に連なるものだというのです。これ以上贅言を控えます。

ともあれ、これらは三年前にゆくりなくも天に召され今は静かに蘇りの時を待つ齋藤忠利先生が荒地に種を播くようにわたくしの不毛の心にかつて播いてくださった聖書の言葉が、わたくしの意志のあずかり知らぬところで時が来て実を結んだものと、心秘かに受け止めているところです。

LL Tea Time

私のハングル習得法

国際コミュニケーション学部4年

金子可奈

「あなたが大学生活で一番頑張ったといえることは何ですか？」

就職活動の面接では必ずこの質問がされます。

私は胸を張ってこう答えます。「国際交流です。」そしてこの後にこう続けます。「私は一人の韓国人留学生と出会い、彼女と彼女の国についてもっと知りたいと思い韓国語を学び始めました。努力の甲斐があってハングル能力検定試験の準2級に合格することができました。」

暗記が大の苦手で勉強する要領も悪い私が、このように発言できるほど韓国語ができるようになった理由は3つあります。それは私がめぐまれた環境にいたこと、自分にあった勉強法を見つけたこと、地道な努力をし続けたことだと思っています。

●めぐまれた環境

留学とは強制的に自分を外国の環境に置き、思考回路など日常の全てをその国の言葉で生活することだと思います。私は日本にいながら留学したくらい韓国に親しんで生活していました。留学しなくとも私の周りには韓国人がたくさんいるのだから留学した気持ちで韓国語に親しもう！これが入学当初の私の目標でした。韓国人留学生（以下「彼女」とします）と親しくなったことから、彼女のご両親が日本にいらっしゃったときお会いする機会があつたり、私も韓国へも2度旅行し彼女の家にホームステイさ

せてもらうこともありました。このように彼女と一緒にいることで韓国語を使う機会がたくさんありました。暗記が苦手な私でも、使う目的があれば楽しくすらすらと覚えられることに驚きました。私にはそのようなめぐまれた環境があったのです。

●自分にあった勉強法

当初私は、韓国語に親しむためにNHKのハングル講座を見て勉強していました。そこで先生が韓国語で日記を書くことを勧めていました。おもしろそう！これなら自分の使いたい言葉を書く練習をすれば、すぐに相手に伝える韓国語を勉強できる。日記帳を自分の教科書にすればいいのだ。幸い私は留学生の友人がいる、彼女に先生になってもらって添削してもらおう！！そこから私の日記生活はスタートしました。文法も単語も全く知らない私が、分厚い辞書を使っていきなり日記を書くのは大変なことでした。5行ぐらいの日記ですが、2時間はかかっていました。きっと一番大変だったのは添削してくれた彼女です。毎日めちゃくちゃな文章の添削を頼まれ、まだ日本語での表現力に乏しかった彼女にとって「何で間違ってるの？」という質問攻めは大変だったと思います。添削してくれた日記から新たに学んだ単語や文法を単語帳に書き出しまとめる生活でした。何ヵ月後には2時間かかっていたものが30分で書けるようになりました、上達が自分でも分かるのでうれしくなりたのしく続けることができました。日記は自分の感情を書くものだからそれを勉強することは、実際会話するのときに自分の感情を伝えることにすごく役立つと思いました。

●地道な努力

日記学習法で韓国語に親しむことができるようになりますが、ハングル能力検定試験を受験することに当たっては、単語をたくさん知らないと話になりません。逆に言ってしまえば、マーク式なので

単語を覚えてしまえば簡単に受かることができます。ハングル検定協会が「ハングル学習の手引き」という本で級別に「必須語彙リスト」を提示してあります。4級は600語、3級は1500語、準2級は4000語になります。4級は勉強せずに合格できたのですが、級が上になるほど激しく増えていく語彙リストには頭を悩ませられました。検定の2ヶ月前から入念な計画を立て、単語帳を作り、ひたすら書いて覚えるように努力しました。友人と一緒に励ましあい、検定期間中はハングルで話すように心掛けました。受けたときは、周りの先生方から「留学していないのにすごいね。」とお言葉をいただき、そこで初めて自分のめぐまれた環境と毎日の取り組みが留学と同じくらいの効果をうみだしたのかなあと気づきました。韓国語を学ぶきっかけも、上達のきっかけもあたえてくれた彼女に感謝しています。

愛知大学は、語学を学ぶのに本当にめぐまれた環境にあります。LL自習室には、先ほど挙げた本はもちろん、語学の教材がたくさんあります。何もしなければ、何も得られず大学生活は終わってしまいます。自ら動けばそこには最高の環境があります。

英語学習の誤解に 気づくまで

国際コミュニケーション学部4年
足 立 義 説

英語学習の誤解に気づくまで、私は英語学習が大嫌いだった。しかし、その誤解に気づくと、私の人生は大きく変わった。現在、私がそうだったように多くの人が漠然と外国語学習をしている。今回はその誤解とはなにか。どのように私の人生が変わったのか。これまでの大学生活を振り返りながら話していきたい。

あれは大学1年の冬。19歳のときに単身ロンドンに留学した。29日間、私はずっとロンドンに住みこんだ。目的はもちろん、英語がペラペラに話

せるようになること。しかし、大きな壁にぶつかっていた。それは語学学校の授業3日目のことだった。授業中にペラーを組んだフランス人女性とのやりとりだった。彼女と英語でディスカッションしているとき、彼女は私に向かってこう言った。「このジャバニーズの英語は何を言っているのか、さっぱりわからないわ」私がそれに言い返す前に、さらに彼女は「もうお手上げよ。早く私のペラーを別の人へ変えて」とその授業の担当者に訴えたのだ。これはショックだった。私は話している内容は聞き取れても、何も言えなかった。お世辞にも英語ができるとは言えないが、今まで二度、韓国の高校生をホームステイで家に招き英語でコミュニケーションをした経験もあって多少なりとも英語でのコミュニケーションに自信を持っていた。しかし、ロンドンでの現実は、あまりに厳しかった。忘れもしない。その日の夜は異国之地のベッドで英語が通じないもどかしさに悔しくて、泣いてしまった。

しかし、ここで一つの転機が訪れた。それは語学学校での出来事だった。先の出来事での傷を引きずりながら、いつもと同じように授業を受けていたときだった。同じ授業を受けていたブラジルやイタリア、タイの人たちの会話が何か変だな気づいた。確かに彼らは英語をペラペラとすごい勢いで話している。最初はボクも、それにはたじろいだ。いや、むしろ怒りを覚えた。「チキシヨー。どうして彼らは同じ外国人なのに、こんなにも英語が話せるんだ！」と。しかし、よく聞いてみると、間違いだらけなのである。彼らの話す英語は文法がぐちゃぐちゃ。ひどいときは単語を乱発しているときもあった。これには私も驚いた。しかし、その時、私は今まである誤解をしていたことに気づいた。

「そうか、なにもパーフェクトな英語でなくてもいいんだ。人とのコミュニケーション、そのものを楽しめばいいんだ！」と。そこに気づいたとき、私の焦点は変わった。それは「英語を勉強する」から「英語をあくまでツールにする」という発想だった。

そう気づいたとき、私は変わった。英語を話すという目的から「これを知りたい！」ということに焦点を変えて、語学学校で同じ授業を受けているイタリアの弁護士やポーランドの政治学者の方々に話し

かけていった。こうして私は国柄や人種に惑わされないでコミュニケーションを学ぶという学習に挑戦した。そしてこれらは帰国後の私に大きな影響を与える、現在は自分の夢を叶えるために、起業家や投資家、メイクアップアーティストにデザイナー、占い師という異業種、多世代の方々と親しくお付き合いをしている。

そう考えるきっかけはより具体的なイメージを抱くことを学んだからだと思う。「なぜ英語を話せるようになりたいのか?話せるようになったら、なにをしたいのか?どんな感情を抱いていて、どんな人と接して、どんなふうに自分の生活が変わるのがか?」

愛知大学言語学談話会 第31回 公開講座「言語」2006後期プログラム

2006年

⑥ 9月16日(土)

「サン・テグジュペリの『星の王子さま』の
日・韓翻訳事情」

田川光照(愛知大学経営学部教授)

⑦10月7日(土)

「呪術戦争:15世紀タイにおける神々と戦争」
加納 寛

(愛知大学国際コミュニケーション学部助教授)

⑧11月4日(土)

「英和辞典の歴史」
早川 勇(愛知大学経済学部教授)

⑨12月2日(土)

「<子供の言語獲得>トマセロの「言語構築」
論を紹介する(シリーズ第1回)」

—その基本姿勢から単語学習まで—

伊藤忠夫(中京大学名誉教授)

2007年

⑩1月13日(土)

「日・中・韓言語比較対照論」
陶山信男(愛知大学名誉教授)

時間:14:30~16:30

場所:愛知大学車道校舎

〒461-8641 名古屋市東区筒井二丁目10-31

TEL 052-937-8111(代表)

(地下鉄桜通線)「車道」下車
1番出口より徒歩2分

◎聴講無料

どなたでも参加できます。(登録不要)

もっと具体的に質問を問い合わせてもいい。目標に対してより具体的な質問をすること。これが英語学習だけに限らず、目標を達成するために大切なことの1つだと帰国後、インタビューしたあるビジネスオーナーから学んだ。

私は英語を勉強していて本当に良かった。途中、何度も勉強するのを止めようとした時があった。そのような中で、周りの方々が励まし、支え、導いてくれたおかげでロンドン留学を決断し、人生を変えることができた。今、改めて友人、家族、先輩、人生の師匠、そして今まで私とかかわってきたすべての方々に「ありがとう」と伝えたい。

2006年度 外国語検定試験奨励金について

下記により受付しますので、申し出てください。

記

1. 奨励対象者

愛知大学豊橋校舎 学部及び短大の学生
(大学院生、オープンカレッジ・孔子学院生、
科目等履修生、研究生は除く)

2. 奨励基準

(1)英語検定	2級以上	(4)中国語検定	3級以上
TOEIC	470点以上	HSK	4級以上
TOEFL PBT	420点以上	(5)ロシア語検定	4級以上
TOEFL CBT	110点以上	(6)ハングル検定	4級以上
(2)ドイツ語検定	3級以上	(7)タイ語検定	4級以上
(3)フランス語検定	3級以上	実用タイ語検定	3級以上
DELF-DALF	B1以上	(8)日本語検定	1級
		ジェトロビジネス日本語能力検定	
		480点以上	

※上記以外の外国語検定試験は受付にご相談ください。

3. 受付期間 2007年1月15日(月)~1月31日(水)

4. 手 続 「学生証」および「合格通知書」を3号館LL自習室カウンターまで持参し、申請して下さい。

5. 奨励金(図書カード)の交付

受付期間終了後に金額を決定し、本人に通知します。

6. 奨励対象の試験 2006年2月~2007年1月の間に合格した検定試験で、同一言語は1種類のみが対象です。ただし、本年度入学生は入学後受験したものに限ります。

(注)以下の試験は対象ではありません。
TOEFL ITP、TOEIC IP、カレッジTOEIC